



望月優子と左幸子

女優監督のまなざし



「日本映画における女性パイオニア」プロジェクト
特別上映会



日本映画における
女性パイオニア

2021年8月29日(日) 11:30—18:00

「日本映画における女性パイオニア」プロジェクト主催
会場 国立映画アーカイブ 小ホール

望月優子と左幸子——女優監督のまなざし 「日本映画における女性パイオニア」プロジェクト特別上映会

2021年8月29日(日) 11:30~18:00(開場 11:00)
主催 「日本映画における女性パイオニア」プロジェクト
会場 国立映画アーカイブ 小ホール(B1)

定員 75名
先着順
入場無料

参加申し込みが必要です。
下記のリンクまたはQRコードからお申し込み下さい。
<https://forms.gle/gdYZiF5DubB84EXf6>
お問い合わせ info.wjpc@gmail.com



望月優子と左幸子——女優監督のまなざし

戦後、日本では大手映画撮影所の助監督への応募資格が「大卒男子」となり、長編劇映画の監督になるエリートコースが女性には事実上閉ざされた。そんななか、第一線の演技者として現場で培った経験と信頼に基づいて監督業に進出し、優れた作品を世に問うたのが、田中絹代をはじめとした女優たちである。今回の上映会では、これまで「女優監督」として紹介される機会が少なかった望月優子と左幸子の作品を上映し、フェミニスト映画史を牽引する登壇者によるトークを行うことで、労働運動や人種など社会問題をつつめた両者のキャリアに光を当てる。

「日本映画における女性パイオニア」プロジェクトとは

映画——とりわけ大予算の商業作品——制作における女性の進出の遅れは「セルロイドの天井」と呼ばれ、グローバルに問題化している。「日本映画における女性パイオニア」は、これまでの映画史のなかで忘れられ、軽視されてきた女性の作り手たちによる仕事を発掘し、紹介するプロジェクトである。

望月優子 (1917-1977)

軽演劇、新派、新劇の舞台を経て、『四人目の淑女』(48、渋谷実)で映画デビュー。『日本の悲劇』(53、木下恵介)に主演し、毎日映画コンクール女優主演賞を受賞。『晚菊』(54、成瀬巳喜男)、『米』(57、今井正)などで多様な母親役を演じ、農山漁村の働く母のイメージを象徴する存在となる。『海を渡る友情』(60)以下3作品を監督、テレビ作品の演出も手がけた。71年に社会党の公認候補として参議院議員に当選、一期を務めた。

『海を渡る友情』(1960、35mm、49分)

望月優子の初監督作品。在日朝鮮人の帰国事業を題材に、朝鮮総連の支援も得て製作された。今は朝鮮民主主義人民共和国となった郷土への帰還を望む家父長と、移住をためらう日本人の妻、そして日本人と信じて育ったため、父親の決めた「帰還」に激しく反発する小学生の息子の葛藤を物語る。

製作：東映教育映画部／監督：望月優子／脚本：片岡薫／撮影：中尾駿一郎／音楽：芥川也寸志／出演者：加藤嘉、水戸光子、野口英明、河口雄三、西村晃



『おなじ太陽の下で』(1962、16mm、50分)

在日米軍兵士と日本人女性の間に生まれた児童が、地元の小学校に通いはじめ、周囲の日本人から孤立し、傷ついていく。故国への帰還を「望ましい解決」とした前作『海を渡る友情』に対し、本作では「混血児」を社会に包摂する必要性が訴えられる。主人公は映画と同様の境遇の児童が演じた。

製作：東映教育映画部／監督：望月優子／脚本：片岡薫、望月優子／撮影：中尾駿一郎／音楽：芥川也寸志／出演者：上原二郎、ジェーン・コーリー、中村雅子、南廣、辻万里



『ここに生きる』(1962、35mm、40分)

全日本自由労働組合の委託により、失業対策事業縮小政策への反対運動の教宣映画として製作されたが、組合側には不評で、運動の場ではほとんど上映されなかった。女性、炭鉱離職者、被差別部落出身者など、多様な出自の日雇い労働者たちの生活を、記録的かつ抒情的な映像と語りで映し出す。

製作：オオタ・ぶろだくしょん、全日本自由労働組合／監督：望月優子／撮影：安承攻(アン・スンミン)／音楽：伊藤翁介／ナレーション：矢野宣



上記3作は国立映画アーカイブ所蔵作品

左幸子 (1930-2001)

戦後、演劇活動と教師の二足のわらじを履きながら、『若き日のあやまち』(52、野村浩将)の主役で映画デビュー。『女中ッ子』(55、田坂具隆)などのエネルギーあふれる演技で注目された。62年にフリーになり、当時夫だった羽仁進監督の『彼女と彼』(63)および『にっぽん昆虫記』(63、今村昌平)でベルリン国際映画祭女優賞を日本人初受賞。作品はほかに『飢餓海峡』(65、内田吐夢)や、主演・監督した『遠い一本の道』(77)など。

『遠い一本の道』(1977、35mm、112分)

戦後を代表する女優左幸子が企画・製作・監督を務めた渾身の一作。高度成長を支えた国鉄保線員とその家族が、労働運動の中で葛藤する姿を丁寧に描く。労働問題を妻や子どもの視点から「生活」の問題として捉えたフェミニスト左幸子の視線が光る。

製作：左プロダクション／監督：左幸子／脚本：宮本研／撮影：瀬川順一、黒柳満／編集：浦岡敬一／音楽：三木稔／出演者：井川比佐志、磯村健治、長塚京三、市毛良枝、西田敏行、殿山泰司、左幸子



スケジュール

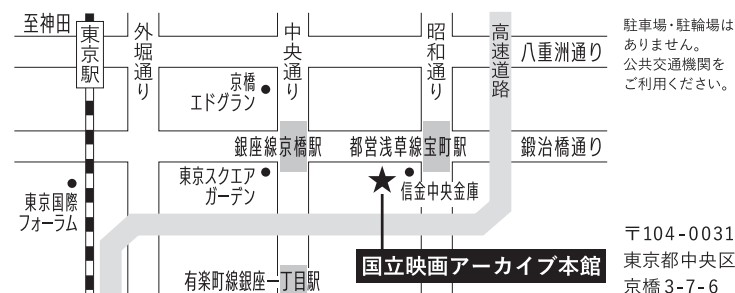
- 11:00 開場
- 11:30 ご挨拶・イントロダクション
- 11:35 『おなじ太陽の下で』上映(～12:25)
- 休憩
- 13:30 『海を渡る友情』『ここに生きる』上映(～14:59)
- 15:10 『遠い一本の道』上映(～17:02)
- 17:10 トークセッション(～18:00)
登壇者 齊藤綾子・鷺谷花・木下千花(司会)

齊藤綾子 明治学院大学文学部芸術学科教授。映画研究(映画理論、フェミニズム映画批評、戦後映画など)。論文に「女が書き、女が撮るときー日本映画史における二人の田中」『明治学院大学 芸術学研究』22号、2012年、13-31頁(<https://bit.ly/3vuYSY6>)。

鷺谷花 大阪国際児童文学振興財団特別専門員。映画学、日本映像文化史、昭和期の幻灯(スライド)文化史。共編著に『淡島千景 女優というリズム』(青弓社、2009年)。

木下千花 京都大学大学院人間・環境学研究科教授。日本映画史、表象文化論。著書に『溝口健二論—映画の美学と政治学』(法政大学出版局、2016年)。

- ### 注意事項
- 新型コロナウイルス感染症への対応のため、参加ご希望の方は、必ず事前にお申し込みください。
 - 感染状況により、定員を増やす場合があります。最新の情報は申し込みサイトよりご確認ください。
 - マスク着用のない方の入館をお断りします。
 - 発熱や風邪などの症状がある方は、来館をお控えください。



駐車場・駐輪場はありません。公共交通機関をご利用ください。

〒104-0031
東京都中央区
京橋3-7-6